

# 曲線と曲面——微分幾何的アプローチ (裳華房) 第7版正誤表

梅原雅顕・山田光太郎

2010/11/20

---

青字は修正対象箇所, 赤字は修正後の文章.

---

- v ページ, 下から 3-4 行目

<http://www.math.wani.osaka-u.ac.jp/group/umehara/>

<http://kotaro.math.kyushu-u.ac.jp>

⇒ <http://www.math.titech.ac.jp/~kotaro/>

- 34 ページ, 2 行目 以下を削除:

そこで  $\gamma$  が少なくとも 1 つ自己交叉をもつとすると,  $\gamma$  は少なくとも 1 つ自己交叉のないループをもつ.

- 34 ページ, 図 3.6 の下から:

自己交叉が  $n-1$  個の曲線については定理が成立すると仮定し, 自己交叉が  $n$  の場合を考える. 基点  $P$  を出発して出会う自己交叉  $Q_1$  を一つ選び,  $Q_1$  からそのまま進んでふたたび  $Q_1$  に戻る曲線の部分の角を ( $C^\infty$  級で) 丸めてできる閉曲線  $\gamma_1$  が単純閉曲線となるようにすることができる. 一方,  $\gamma_1$  と反対側に角を丸めてできる閉曲線を  $\gamma_2$  とする (図 3.6. 角を丸める方法については付録 B-5 の命題 5.7 参照).

⇒

自己交叉が  $n-1$  個の曲線については定理が成立すると仮定し, 自己交叉が  $n$  の場合を考える. 自己交叉  $Q_1$  を一つ選び,  $Q_1$  からそのまま進んでふたたび  $Q_1$  に戻る曲線の部分の角を ( $C^\infty$  級で) 丸めてできる閉曲線  $\gamma_1$  が単純閉曲線となるようにすることができる. そのような自己交叉のうち, 基点  $P$  を出発して最初にあらわれるものを  $Q_1$  とすると  $\gamma_1$  は  $Q_1$  より手前の交点を通らない. 一方,  $\gamma_1$  と反対側に角を丸めてできる閉曲線を  $\gamma_2$  とする (角を丸める方法については付録 B-5 の命題 5.7 参照).

- 34 ページ, 下から 5 行目 すると ⇒ ここで,  $Q_1$  の交点の符号に注意すると,

- 34 ページ, 下から 3 行目

$$\begin{aligned}
 &= \text{sgn}_{P,\gamma}(Q_1) + \sum_{R: \gamma_2 \text{ 上の } \gamma_1 \text{ との交点}} \text{sgn}_{\gamma_2,\gamma_1}(R) + \sum_{S: \gamma_2 \text{ の自己交点}} \text{sgn}_{\gamma_2,\gamma_2}(S) \\
 \Rightarrow &= \text{sgn}_{P,\gamma}(Q_1) \left( 1 + \sum_{R: \gamma_2 \text{ 上の } \gamma_1 \text{ との交点}} \text{sgn}_{\gamma_2,\gamma_1}(R) \right) + \sum_{S: \gamma_2 \text{ の自己交点}} \text{sgn}_{\gamma_2,\gamma_2}(S)
 \end{aligned}$$

- 120 ページ (12.2) 式と (12.3) 式を入れ替える .

- 128 ページ, 3 行目 「(12.3), (12.1) と 補題 13.1 より」  $\Rightarrow$  「(12.2), (12.1) と 補題 13.1 より」

- 134 ページ, 10 行目

$$X_4 = (u^2 - v^2) \frac{\partial}{\partial u} - 2uv \frac{\partial}{\partial v} \quad \Rightarrow \quad X_4 = (u^2 - v^2) \frac{\partial}{\partial u} + 2uv \frac{\partial}{\partial v}$$

- 186 ページ, 9 行目

$$\lim_{u \rightarrow \pm \frac{\pi}{2}} \eta = \pm \infty \quad \Rightarrow \quad \lim_{v \rightarrow \pm \frac{\pi}{2}} \eta = \pm \infty$$

- 201 ページ, 13 行目

(6.1) が成り立つことがわかる . 式

(6.1) はフルネの公式と §2 の (2.7) 式をあわせれば, 直接計算でも示せる .



(6.1) が成り立つ . ただし  $\tilde{\gamma}$  に特異

点があると, ここでの  $n$  は  $\tilde{\gamma}$  の左側から右側に变化する可能性がある .

- 214 ページ, §12 の問題 1 の解答

以下に差し替え :

(12.1) と (12.2) から (12.3) を導くのはそれほど難しくない . ただし  $d\alpha$  が性質

$$d\alpha(fX, Y) = f\alpha(X, Y)$$

を満たすことも確かめる必要がある . そのためには, ベクトル場の交換子積の性質

$$[fX, Y] = f[X, Y] - df(Y)X$$

を用いる .

- 225 ページ, 梅原の略歴

筑波大学助手, 大阪大学助教授, 広島大学教授を経て, 現在 大阪大学 教授  $\Rightarrow$

筑波大学助手, 大阪大学助教授, 広島大学教授, 大阪大学教授を経て, 現在 東京工業大学 教授

● 225 ページ, 山田の略歴

慶應義塾高等学校教諭, 熊本大学講師・助教授を経て, 現在九州大学 教授

⇒

慶應義塾高等学校教諭, 熊本大学講師・助教授, 九州大学教授を経て, 現在 東京工業大学 教授